

課題研究科目「地域づくり」の 立ち上げとセミナー開催

名古屋市立大学大学院人間文化研究科

佐野直子・浜本篤史

二〇一五年四月、私たちは、人間文化研究科における課題研究科目「地域づくり」を新たに立ち上げた。それまでの「グローバル社会と地域文化」を発展解消し、佐野、浜本に、新任の市川哲を迎え、わずか三名体制での新たな船出である。課題研究科目という名前は少々長いので、私たちはこれを機に「地域づくり」ユニットと呼ぶことにした。

例えば、研究科発足当時（二〇〇〇年）からの「多文化共生」を「グローバル社会と地域文化」へと改称したのは二〇一〇年度のことであった。赤嶺淳、野村直樹、佐野、浜本の四名のスタッフにより、フィールドワーク（教育）を軸とする国内外の地域研究に特化したのであった。人々の暮らしや文化との接点を軸に、調査のスキルを磨きながら、そして、現場を歩きながらのアプローチである。

これ以降、外部公開で重ねてきた「グローバル社会を歩く」セミナーは十二回を数え、とりわけ二〇一四年十二月に開催した「聞き書き」をもちいた地域づくりの可能性」では、約九〇名の熱心な参加者が全国から集った。また、地域社会での聞き書き実践を中心とするブックレットシリーズを八冊刊行してきたほか、研究者による現場経験をまとめた赤嶺淳編『グローバル社会を歩く——かわりの人間文化学』（新泉社、二〇一三年）を刊行するなど、わずか五年のあいだに立て続けに成果を出してきた。大学院生たちの報告会や、研究会の場ではいつも真剣勝負で妥協のない、そして自由闊達な議論が渦巻くのが常であった。

し、野村の退任も二〇一五年度末に控えていたことが大きい。しかし、理由はそれだけではない。これまでの活動実践や、本研究科への社会的ニーズを考えたととき、名古屋をはじめとするまちづくりやむらおこしなど、地域活性化を前面に打ち出した受け皿が必要だと感じていたからである。こうして私たちは、さらに一歩踏み出すことにした。

とにしたのである。同時に、参加者同士の交流も大きな狙いとした。私たち自身が学び、かつ、楽しむこともひそかな目論見である。こうした考えにもとづき、二〇一五年度は三回の「地域づくり」セミナーを開催した。

第一回（二〇一五年六月十四日）
 サクラサイドテラス
 参加者約四〇名
 嵯峨創平
 「農山村の文化的景観をめぐる保全と活用の課題」下呂市馬瀬地区を事例に」
 浅野健
 「四間道・那古野界限における地域まちづくり」

第二回（二〇一五年十一月七日）
 聞き書き十かわらフォーラム
 高浜市やきものの里かわら美術館
 参加者約一〇〇名
 佐野直子×岡島正明
 「いま、なぜ『聞き書き』なのか」金子智

「二〇分わかる！『三州瓦』の基礎知識」
 名古屋市立大学学生
 「聞き書きかわらプロジェクト」

中間報告

アルメル・フォー

「地域における『聞き書き』実践の秘訣——フランスの事例から」

第三回（二〇一五年十二月六日）

よそ者・若者・馬鹿者による

「まちづくり」実践ストーリー

サクラサイドテラス

参加者約三五名

原田忠直

「覚王山商店街の秘密——愚者への誘い——」

椎葉美耶子

「桜山商店街に出会い私たちの軸を探り深める」

各回のセミナー概要を、報告者自身あるいは参加者の方に執筆をお願いして、以下に記すことにした。本ユニットのウェブサイトを(<http://www.region-ncnum.com/>)にも参加印象記などを掲載しているのであわせてご覧いただきたい。

▼第一回

「地域づくり」セミナー

岐阜県下呂市馬瀬地区の村おこし

報告を聞いて

山県市地域おこし協力隊

柴田沙緒莉

本報告では、岐阜県立森林文化アカデミー教授の嵯峨創平さんが、まちづくりに携わっている岐阜県下呂市にある馬瀬地区の事例に焦点をあてられた。

同地区では、一九九四〜九六年にかけて馬瀬川の水質が悪化したことなどをきっかけに、馬瀬森林山村開発活性化研究会が設立された。そして地域全体を公園に見立てたフランス発祥の「地方自然公園制度」をモデルに、馬瀬の美しい里山景観を生かした村おこしとして「馬瀬地方自然公園三カ年計画」を策定。景観整備、看板の設置、見どころマップやポスターの作成を行ってきた。また、渓流では例のなかった「渓流魚付き保全林制度」を設け、景観と同時に生態系の保全にも努め、二〇〇七年には「日本で最も美しい村」連合にも加盟した。その後の「五カ年計画」でも「馬瀬川の鮎」ブランド化や、ウォーキングツアーの実施などに取り組んできたが、その一方でガバナンスの弱さや補助金事業への依存、住民への浸透など

が課題として残っているという。

こうした中、岐阜県立森林文化アカデミーでは馬瀬地方自然公園づくり委員会から委託を受け、馬瀬の西村地区において「森づくり基礎調査」を実施してきた。渓流沿いの生態系調査だけでなく、社会資源調査として、自然と共存しながら生活を営む住民への聞き書きを行うことで、自然と暮らしとのつながりを浮き彫りにする。それを基に作成されたのが「ふれあいマップ」である。これは、単なるありふれた観光ガイドマップではない。その狙いは、高齢者から子ども世代への伝承やモニターツアーへの展開、住民自身の気づきと自信の醸成につなげていくことであった。

この点、私自身も名古屋市立大学人文社会学部での学生時代、聞き書きの経験を何度かしてきた。また、聞き書きの事例もいくつか見てきたが、それぞれテーマや形式にちがいはあれど、成果物として文章を残すという点で共通しているものが多かった。そういった中で、聞き書きの成果を地図にまとめた「ふれあいマップ」は、普通の暮らしの中によそ者が入っていくためのツールになるといった点において画期的であると感じた。

嵯峨さんは最後に、最新の動向を紹介された。馬瀬で以上のような一連の調査や取り組みを基に、二〇一四年五月に「馬瀬里山ミュージアム」が誕生したのである。里山ならではの知恵や技を体験する教育旅行、「里山の暮らし」を見せる環境整備、「景観＋食文化」でおもてなし、移住者のお試し田舎暮らしやアーティストの創作拠点づくりなどを今後推進し、都市からの交流人口を増やすことで、地域の活性化を図る。下呂市でも二〇一四〜一八年の「馬瀬地方自然公園第二次五カ年計画」を進め、「美しい村づくり」と「美味い村づくり」を二本柱に、経済的自立と住民の参画を促している。集落を維持していくために、文化的景観を保存・管理していくだけでなく、草の根型の「里山ミュージアム」と経済型の「観光DMC」の両立を目指し、「参加×資金の循環」を図っていく試みである。

現在、馬瀬地区には「地域おこし協力隊」も入っている。嵯峨さんは、「よそ者が里山で生きていくには『予測できない自然』と『手間のかかる暮らし』を楽しめるのが重要」とおっしゃった。これまでも私は、協力隊をはじめ地域活動

に従事している方々にお会いしてきたが、それぞれ個性や得意分野が異なっても、当然「田舎暮らし」が嫌いという人はいない。何かしら田舎暮らしの楽しみ方を知っている人ばかりだ。そしてよそ者でも、暮らしや自然と真摯に向き合いたい楽しみながら活動していれば、住民も力を貸してくれるようになる。そういつたいい連鎖を生み出すことは、まちづくりの第一歩にもなり得るのだろう。

四間道・那古野界隈における地域まちづくり

四間道・那古野界隈まちづくり協議会事務局

浅野 健

四間道・那古野界隈は、超高層ビルの再開発が相次ぎ二〇二七年にリニア中央新幹線開業が予定されている名古屋駅の一キロメートル圏に位置する。街の形成は、四〇〇年前に名古屋城の築城や堀川の掘削が開始された時にさかのぼる。江戸時代には元禄（一七〇〇年頃）の大火の後、防火のために四間（約七・二メートル）に拡幅された道が堀川沿いに整備された。これが「四間道」の名称にルーツ

といわれている。他にも名古屋と岐阜県を結ぶ「美濃路」、昭和レトロが感じられる円頓寺・円頓寺本町・西円頓寺の三商店街、その北側の明道町周辺の菓子産業集積地など、江戸時代から昭和にかけての歴史文化がそこかしこで感じられ、他所にはない魅力がある。一方、最盛期から比べれば人口が二分の一以下に減り、高齢化が進むなど課題もある。

四間道・那古野界隈では、二〇〇〇年頃から徐々にまちづくりに関わる団体が発足し、まちづくり活動が活発に行われてきている。そして、二〇一二年十月に四間道・那古野界隈まちづくり協議会（以下、「協議会」という。）を発足した。「地域の力で地域を育てる」取組みを進めていくため、学区、商店街組合といった地元組織や、産業団体、まちづくり団体など十三の団体が会員となり、四大学（名古屋大学、名古屋工業大学、日本福祉大学、名古屋学院大学）の先生にアドバイザーを、名古屋市各部署や西区役所、名古屋都市センター、名古屋国際センターにもご協力をいただき、活動を進めてきている。

協議会の発足当初から、会員同士、あるいは会員と行政との情報

交換を密に行い、多彩なプレーヤーに支えられながら発足から二年半後の二〇一五年三月に地域まちづくり構想案を作成した。四間道・美濃路・堀川に象徴される「名古屋のルーツ」ともいえる歴史文化を活かし、円頓寺秋の祭り祭などの新たなイベントや、商家や長屋が現代風のスタイルの店舗に変わるなど「新たな文化」が生まれるエリアでもあることから、これらを意識して基本理念を「名古屋のルーツを語り新たな文化を紡ぎ出すまち」とまとめた。このまちづくり構想案に基づいて様々な活動に取り組んでおり、その一例を紹介する。

◇川伊藤家の活用

川伊藤家は、江戸時代より堀川の水運を利用した商家の典型で、一九八七年に愛知県文化財に指定され、町並み保存地区の景観を象徴する建造物である。その活用を図るべく、ご当家の承諾を得て二〇一四、二〇一五年の秋に文化財建造物の清掃ボランティアを実施した。二〇一五年の時には、清掃活動と並行して、江戸時代より川伊藤家と関係があった港区南陽地区のお米を提供していただき、堀川を使って熱田区の宮の渡ししか



ら川伊藤家まで船でお米を運び、地域の親子連れなどの参加者におにぎりを作ってふるまう「おむすびごころん大作戦」というイベント仕立てとした（右の写真）。こうした活動を継続し、川伊藤家の周知やガイドボランティアの育成など「おもてなし」方策を検討する。

◇那古野小学校跡地活用への提案

那古野小学校は、お隣の幅下小学校と江西小学校との三校統合により二〇一七年三月には廃校になる予定である。那古野小学校は、地元の那古野学区が地域防災拠点や地域交流拠点として長年活用してきたおり、学区の人々の関心が

非常に高い。那古野小学校跡地の活用に関しては、まちづくりのシンクタンクである名古屋都市センターの研究成果もあり、センターの支援を受けながら学区と協議会が共同して検討を重ね、二〇一四年十一月に名古屋市教育局委員会に要望書を提出した。現在もさらに詳細な検討を重ねている。

協議会では、継続的な活動を目指すとして二〇一五年度から会費制（二団体一〇〇〇円）とした。事務局を預かる身として、メンバーによる自発的な取り組みを尊重しながら資金確保、会員拡大、広報の展開など運営強化を図っていきたいと考えている。

▼第二回 「地域づくり」セミナー報告

「聞き書き十かわらフォーラム」に参加して

人間文化研究科前期博士課程

水野悦子

第二回セミナーは、「聞き書き十かわらフォーラム」と題して、本研究科「地域づくり」ユニットと愛知県高浜市との共催でおこな

われた。私は、佐野直子先生が指導されている高浜市での三州瓦聞き書き活動に参加し、当日はその中間報告の機会をいただいた。少し協道にそれるが、まずこの活動を紹介しておきたい。

◇高浜での聞き書きプロジェクト

高浜市では、「タカハマ！まるの魅力を百年先の子どもたちへ」という取り組みを昨年度からおこなっている。高浜市の魅力を発掘するための活動である。これに今年度、本研究科の「地域づくり」ユニットが加わり、高浜市の主要産業であり、全国一の生産量を誇る三州瓦についての聞き書きをおこなう学外研修が本学人文社会学部でも開講された。これに、院生、科目履修生を含む計十二名が参加し、五チームに分かれ、十名の方への聞き書きをおこなった。

六月の初訪問では、高浜港駅からかわら美術館までをつなぐ「鬼みち」を案内していただき、またかわら美術館においては市の歴史や三州瓦のレクチャーを受けるなど、盛りだくさんの支援と歓迎に、高浜の方の熱い想いと期待を背負うこととなった。八月に語り手さんが決定し、各班で事前調査を行

い、KJ法によって語り手さんへの質問を整理した。

九月に各班が無事にインタビューを終了。その後、膨大な量の語り全てをテープ起こしすることから始まり、読み手にわかりやすい表現等に留意して、全ての原稿に全員で赤入れチェックをすることで、お互いの原稿に厳しく指摘しあった。こうして、フォーラムに向け怒涛の準備の日々が続いた。

◇いま、なぜ聞き書きか

十一月七日のフォーラム当日。

第一部ではまず、高浜市文化スポーツグループの岡島正明さんが「タカハマ！まるごと宝箱」プロジェクトの趣旨と取り組み、その中でも今回は、特に三州瓦に様々な形でかわって来た人たちを語り手とした「聞き書き」を実施する意味を説明した。かつて三〇〇の煙突があったという高浜市の主要産業である三州瓦は、その製造方法が大きく変わったのみならず、それに伴って人々の生活も大きく変容している。モノとしての瓦それ自体や、当時の写真などの資料を集めるだけでなく「かわらに携わる人々の生きざま」を語りとして残していきたい、という想いが



この活動のきっかけであった。

次に佐野先生が「いま、なぜ聞き書きなのか」をテーマにお話をされた。まず、高浜市の吉岡初浩市長が島根県隠岐郡海士町に視察に訪れ、海士市で本学が実施してきた「聞き書き」を知ったことがきっかけで始まった高浜市とのかわり、そして「聞き書き」をする目的、この手法が持つ様々な意義や効果について説明された。

最後に、現在全国の瓦の生産シェア七〇%近くを占めながら意外にその存在を知られていない三州瓦が、どのようにして生まれ、どう発展したか、そしてこれからについて、かわら美術館教育研究

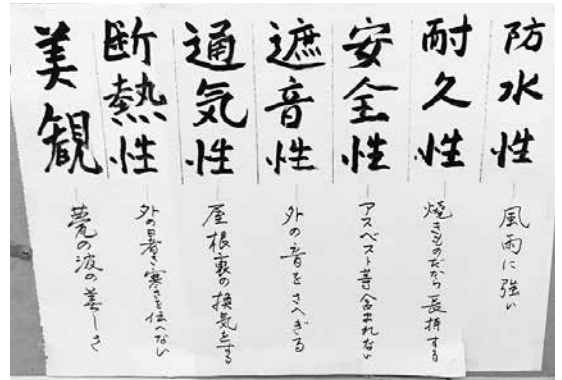
課長であり「かわら博士」と言われる金子智さんが紹介された。

◇学生による中間報告

第二部の聞き書き報告は、語り手さんが全員出席してくださった前での発表である。

瓦職人や「鬼師」と言われる鬼瓦を作る専門の職人さん、それらの瓦工業の組合長をやっている方など、高浜の瓦産業を長年にわたって支えてきた方々は、昔の瓦づくりや当時の苦勞、現在との違い、国宝や重要文化財の修復工事の様子、今後のリサイクル事業・需要開拓事業、海外への展開、東日本大震災への支援など、瓦産業のさまざまな面を語ってくださいました。瓦製造の後継者育成にも積極的にいかわり、瓦の懐かしさとしての伝統を守り伝えると同時にブームを取り入れるなど、次世代に向けて新しいものを創り出していく取り組みの必要性などを訴える方もいらっしやう。製作者の想いは代々受け継がれ、その信念は現在の瓦造り産業を支える力となっている。

また、地域に長年くらし、高浜市の生活や文化を支える仕事に携わっている方々も多い。高浜市全体を「大家族」というテーマを作っ



て捉え、みんなを巻き込んで活動しているという連帯感を、高浜の大きな魅力として語られた。「鬼みち」の整備に関わった方や、それに伴う「鬼みち案内人」を長年やっていらっしやる方など、高浜の魅力を対外的にも地元の人達にも積極的に紹介している。昔の瓦造りを支えるだるま窯を復活させようと「だるま窯プロジェクト」を中心に、現在の住宅事情にあったモダンな瓦を提供するとともに、昔ながらの瓦の良さ（右の写真）を伝え続けようという取り組みも行われている。

◇フランスの聞き書き実践

第三部では「地域における『聞き書き』実践の秘訣——フランスの事情から」というテーマで、世界銀行コンサルタント、国立自然歴史博物館客員研究員など、人類学者として幅広く活躍されているアルメル・フォールさんの講演が行われた。フランスにおける三つの事例、ヨーロッパ最大であった鋳物工場の労働者、マルセイユに暮らすアルメニア人共同体、そしてご自身が実施している、五つのダム建設によって風景も暮らしも大きく変容したドルドーニュ川流域住民一〇〇人への聞き書きプロジェクトについて紹介された。「聞き書き」とは、今まで声をあげられなかった人たちの声を聞くことであり、そのことが地域のダイナミズムを生み出すことができると主張された。

このフォーラムを通じ、「聞き書き」という手法の魅力と同時に、高浜の魅力、三州瓦の魅力、高浜に生きる人々の魅力をより深く感じた。出席された語り手さんからは、「普通に話した会話を、これほどうまくまとめ素晴らしい作品にしてくださいましたことに、とても感動しています。」と嬉しいお言葉をいただいた。しかし、これで

終わりではなく、この学びから得たものを冊子刊行という形で発信することが、私たちの到着点となる。

また、私たちが行った聞き書きは、「よそのもの・わかもの」による新しい高浜の魅力の発掘にとどまらず、フォーラムでアルメルさんが指摘されたように、高浜の持つ力強さを生みだし、まちの魅力、瓦の魅力を一層浮かび上がらせる。「よそのもの・わかもの」である私たちの眼からみた「かわらの魅力」「かわらのまちの文化や歴史」などに迫る可能性について考えさせられた。

▼第三回

「地域づくり」セミナー

桜山商店街に出会い

私たちの軸を探り深める

まちプロデュース代表

椎葉美耶子

以前、新聞（中日、二〇一四年十一月二十三日）に私たちの活動を取り上げられたことがある。その記事を見て気に留めてくださった浜本先生から今回、講演の機会をいただいた。

その活動とは、名古屋市立大学経済学部の学生時代から十年続けてきた桜山商店街を中心としたまちづくり活動である。所属していた岡田広司ゼミにてきっかけをいただき、産学官連携の取り組みとして始まった。岡田先生は大手企業での活躍を経て教授になった経緯からも、民間企業的な人材育成を行っていた。そのため、私たち学生（二〇名ほど）に対して寛大な心で接し、やりたいことをやらせていただける環境をつくってくださった。私たち学生は、質はともあれ、湧き出てくるアイデアを実践まで繋げられる環境に、意欲を増し、活性化活動に没頭していった。それは具体的に、桜山商店街での店舗審査（ホコリが残っていないか、社会貢献に繋がる活動をしているかなど、約二〇項目によるお店のチェック）であった。また、空き店舗活用として八百屋を運営しながら、春や冬に地域住民に親しまれるようなイベントを開催し、キャラクター制作と活用などを行った。

この活動は卒業後も続いた。桜山に愛着がわいていた。桜山に住み、何かできることをという気持ちで、一人で桜山の活動に顔を出しはじめた。しかし、社会人として

一人で活動することに寂しさを感じた私は、かつてのゼミ生に声をかけた。「一緒にイベントをやるう」と。すると、「アイデア出しなら協力できる」「イベント当日だけ参加でよければ是非やりたい」と、それぞれのライフスタイルに合った参加の方法が見えてきた。社会人となったかつてのゼミ生はなかなか集まりにくいのではないかと思っていたが、思い違いであった。私は活動を継続する糸口を見つけた心が温かくなった。

そして現在、主要メンバー四名のうち、二名（私と山本はるか）は元名市大ゼミ生、他二名は社会人になって新たに出会った一般の



方である。大規模なイベントを桜山で開催する際にスタッフとして最大五〇人の協力を得たことがあり、その約半数は元市大生であった。桜山に思い入れのある卒業生のコミュニティだ。このような協力体制があるからこそ、思い切ったイベントも実現可能である。そして、二〇一〇年に団体名を「まちプロデュース」と改名し、今年で十一年目となった。

今回の報告を準備するにあたり、これまでの活動内容や、心境を振り返る機会となった。もちろん、最初からこのようなスタイルで活動を継続するつもりではなかった。活動を通じて、仲間と活動する楽しさを味わい続けたという気持ちを抑えることができなかったのだ。学生の頃、私は「アルバイトをすればお金をもらえるが、この活動からはもらえない。単位がもらえる訳でもない。人は何をモチベーションにして行動を起こすのかを考える訓練する期間として一生懸命取り組もう。そこから得られることは後の働き方にも大きな好影響を与えるだろう。」という心境であった。それが社会人になってからは、「学生の時にお世話になった商店街に少しでも恩返しをしたい。実際に桜山商店街の

認知度が上がり、お客が増えることに繋がる企画を立案実行していきたい」という気持ちへと進んできたように思う。夏祭り、美食など解き、街コン、カレー祭りなど、各種カルチャー教室などの企画運営を行ってきた。活動を通して、ゆるやかな人々のコミュニティができあがり、賑わいをもたらすことができたといえる。詳細は、「平成二十六年度市民研究報告書地域イベント開催による地域活性化への効果」（発行：公益財団法人まちづくり公社名古屋都市センター）にてまとめている。

最後に、準備と報告をとおして気づいたことを三つ述べたい。第一に、皆様に熱心に聞いていただき、質疑応答で有意義な意見交換ができたという事実によって、これまでの活動が有意義なものであると感じ、自信に繋がった。一方、有識者と交流をとおし、自分自身が学ぶ機会を持ちさらに活動のレベルを上げる必要があると実感した。第二に、活動自体が私自身のライフスタイルといっても過言ではなく、私の人生観の表現活動を行っている。第三に、人生の節々に困った時には、活動で培った繋がりに自分自身が助けられていることである。

今回の機会はこのようにして、気づきとともに自分の改善点と向き合うきっかけとなった。これまでの経験をさらに地域活性化の現場で活かしていけるよう、チームとして学び成長していきたいという所存である。

覚王山商店街の秘密 ―愚者への誘い―

覚王山商店街振興組合理事
日本福祉大学経済学部准教授

原田忠直

◇聖なる場所の俗なる存在

「覚王山」の「覚王」とは、「仏陀」の別名である。つまり、「覚王山」を字面で読み解くと「仏陀の山」ということになる。事実、日泰寺には「仏舍利」がある。したがって、より正確に言えば「仏陀の眠る山」ということになろうか。その上、「仏陀」とは、「目覚めた人」、「真理を悟った者、すべての煩惱を打ち消し、完全な真理を実現している者」にほかならず、まさに尊き人が眠る聖地といっても差し支えない。いずれにせよ、「覚王山」とは、随分、由緒正しく、格式高き場所である。

ところが、「仏陀」のお膝元に

位置し、日泰寺の参道の商店を中心に組織されている覚王山商店街とは、実に俗っぽい存在である。覚王山では、毎年、春・夏・秋の三回のお祭り、年一回の参道ミュージアム、毎月一回のマルシェ、年越しの振舞い、さらに、

数年に一度の古本市などのイベントを開催している。また、日々のホームページの更新はいままでもなく、毎月、三回メルマガを発信し、「覚王山新聞」を発行し、数年に一度「覚王山マップ」を更新するなどの情報発信も行っている。これらの活動は、一方で、全国の商店街からの注目を集め（実際、年に数回、全国各地から視察団が訪れ、成功の秘密を聞きに来ている）、あるいは「名古屋で住みたい街」のナンバーワンに選ばれているのだが、他方では、すべては「お金儲け」のためでもあり、「煩惱」にまみれ、「真理」とは程遠いものである。ただ、今の世の中には、街の「活性化」であるとか、「安心・安全な街づくり」などという実に便利な言葉が存在している。「お金儲け」を、これら言葉に置き換えると、聞こえは良くなる。多少は俗っぽさも解消される。あるいは、商店主は、汗水

たらして儲けたお金をつぎ込んでまで、街の「活性化」、「安心・安全」のために努力している、なんと「善き人」なのか、まさに「目覚めた人」であると勝手に思い込まれるかもしれない。

◇実行部隊メンバーの精神

だが、少なくとも私が知る限りにおいて、上述した覚王山商店街の諸活動の実行部隊であるメンバーが、「善き人」でもなければ、「目覚めた人」であろうはずがない。その上、メンバーが「活性化」、「安心・安全」などという言葉で街を語ることはない。せいぜい補助金申請時において、その書類にそれらの美しい言葉を散りばめるくらいである。ただし、だからと言って、実行部隊のメンバーが、「お金儲け」という煩惱に覆い尽くされているわけでは決してない。そもそも、「お金儲け」を第一にするならば、商店街の諸活動に携わることは、無駄なことであり、経済合理性という視点からみれば、極めて愚かな行為である。もちろん、街が賑わえば、多少はお店の売上げにも結び付くだろうと思うかもしれないが、その保障はどこにもないばかりか、仮に、そんな雲を掴むようなことを真顔

で話す店主がいたとすれば、実に間抜けである。つまり、イベントのアイデアについてあれこれと考え、その上、書類を作り、関係部署に電話やメールで連絡したりする行為、すなわち、自分のお店の仕事を脇に置くような行為は、愚行の極致である。

では、どうして実行部隊のメンバーは、本来の店主の姿とでもいうべき「お金儲け」だけに精を出さず、街の活動にかかわり続けるのだろうか。この問いへの回答こそが、覚王山商店街の「秘密」にほかならず、言い換えれば、他の商店街からみて、覚王山商店街は「元気がある」とか、「賑わっている」と評価される最大の要因であろう。惜しみなくその「秘密」を暴露すれば、それは、実行部隊のメンバーたちが、諸活動を「面白い」、「楽しい」と感じているからである。詳しくいえば、実行部隊のメンバーは、街の「活性化」、「安心・安全」のためという目的に向かつて進んでいるわけではなく、ましてや「お金儲け」を目的に据えているわけではない。ただ、単純に「面白い」、「楽しい」という個人的な快楽を求めているに過ぎない。もちろん、企画するイベントなどが実現されていくこ

とは、自分たちの価値観を表現し、自己実現の達成であり、そこに「面白さ」、「楽しさ」を見出すことも可能である。しかし、それ以上に、メンバーと戯れているその時にこそ、「面白さ」、「楽しさ」を感じることができるのだ。実際、私も、そのメンバーの一人として、月に一、二回ほど、私の自宅の間で繰り広げられる「会議」と称した「飲み会」に参加して、楽しいひと時を過ごしている。酔えば酔うほどにアイデアは生まれてくる。そして、それをどのように実現すべきかを酩酊した頭で考える。その上、酔いすぎて、翌朝、メンバーの多くが、最高のアイデアを忘れてしまい、「昨日って、結局なにを話したの?」と真顔で言い合う。「それじゃ、もう一回やらな」と半ばエンドレスな愚行が繰り返される。

◇目標も目的も持たない面白さ

このように「お酒」ばかり飲んでいることが、覚王山商店街の秘密だと、言われて納得できる人は決して多くはないだろう。または「お酒」を楽しく飲んでいられるのか、と疑問を抱かれても、それは至極当然でもある。しかし、そ

んな思いを抱いた人々には、次の言葉を贈りたい。それは、アーレント研究の第一人者とも言うべきジェローム・コーンの言葉である(ハンナ・アーレント著 ジェローム・コーン編『政治の約束』(高橋勇夫訳筑摩書房、二〇〇八年、二六頁)。すなわち、「もし私たちが自分たちの活動の目的に終わりを前もって知ったならば、その目的はそれを実現するためのすべての手段を正当化するだけではなく、『神聖化』をもしてしまうだろうと。このとき活動の目標と原理、さらには活動それ自体も、意味をなさなくなり、歴史は、ヘーゲルとマルクスをも含む歴史哲学者たちが考えるような、合理的で必然的な過程になるであろう。政治的に言えば、人間の自発性が意味するのは、私たちは活動しているときには活動の目的に終わりを知らないということであり、もし知っているとするなら私たちは自由ではないということなのだ」。

実に、深みのある言葉であるが、最後に出てくる「自由」という言葉を「面白さ」、「楽しさ」に置き換えれば、覚王山商店街の秘密をより具体的に理解できるのではないだろうか。つまり、街の「活性化」、「安心・安全」といった目的を、

もしも、私たちが抱いてしまったら、その瞬間、「面白さ」、「楽しさ」は、指の隙間から零れ落ちていくことになるだろう。周りからみれば、覚王山商店街の活動は、目的も目標も持たず、場当たりに映るかもしれないし、その上、愚者という烙印を押され続けることになるであろうが、私たちは、自らの快楽を享受し続けるためには、この言葉に従うしかないのだ。

◇若者に言葉はいらない

ただし、覚王山商店街の前途に問題がないわけではない。今回のシンポジウムのサブテーマでもあった「若者、よそ者、馬鹿者」に即していえば、実働部隊メンバーの多くは、「よそ者」であり、「馬鹿者」、すなわち愚者そのものであるが、「若者」の補充が一つの課題となりつつある。どうすれば、商店街の諸活動に「若者」を引き寄せることができるのだろうか。とくに、この問題を議論したことはないのだが、その答えも、やはり愚者として愚行を続ける以外に道はないと考えている。

たとえば、若者に次のように語りかけたら、若者を動かすことができるだろうか。街の「活性化」、「安心・安全」のために、「一

緒に活動しよう! そうすれば、いい経験になるだろうし、人脈も広がる。さらに、生きがいを感じられるよ」と。実際、若者に聞いてみないとわからないが、私は、こんな言葉で若者が動くことはないと思っている。むしろ、大人たちが、意味もないことに夢中になる姿、愚行を繰り返す姿に若者は動かされるのではないだろうか。